

豊かな人間性を培う家庭教育の支援

－生徒の豊かな成長を目指した学校と家庭とのつながり－

田原本町立田原本中学校 教諭 三 崎 佳 余 子

Misaki Kayoko

要 旨

中学生期の子どもは、依存と自立を同時に求め、夢と不安を抱きながら日々を過ごしているように思われる。この時期には学校での出来事を家庭で語らなくなり、学校、塾や習い事などに忙しい生活の中で、自分の気持ちや状況をゆっくり話す時間も少ない傾向にある。様々な形で心身共に大きな変化が見られる時期であるからこそ、学校と家庭とがそのつながりを見直し、一人一人の生徒の豊かな成長を支援する必要があると考える。そこで、思春期の子どもを学校と家庭が共に見守っていく取組について研究した。

キーワード： 家庭との連携、中学生期の子どもの変化、情報の交流

1 はじめに

中学生期の子どもは、思春期まっただ中にある。この時期は、子どもから大人への過渡期であり、心理的離乳、自己形成や自我の発見が行われる時期である。それが、この時期が「第2の自分の誕生日」であるとも言われる理由である。

誰もが自分自身の存在価値を確かめたい、認められたいと願っている。反発や衝突を繰り返しながらも家族や友だち、近しい人々からの愛情を求め、自分の領域に踏みこまれることを拒否しながらも、深く理解し応援してもらうことを求めている。この心理的な特徴は、愛情を再確認し、もう一度自分自身を見つめることが、大人として自立していくための土台づくりに必要な作業であることに起因するのではないだろうか。

思春期における豊かな成長のためには、家庭の役割が改めて重要になってくる。しかし、家庭では、日々変化する子どもを目の前にして、どう向き合えばよいか戸惑い、模索する姿がみられる。

また、学校は子どもが集団生活の中で多くのことを学び、成長していく場である。将来社会の中で生きていく自分と、現在の自分との間にある大きな壁を乗り越えようと模索するこの時期に、家族以外の多くの人とのかかわりを通して自己確立の土台をつくっていくという意味において、学校が思春期の子どもの成長のために果たす役割は大きい。

そこで、学校と家庭がつながることで、子どもをより深く理解し、個々の人間性の豊かな成長を見守り、協力しながら支えていくことができると考え、その効果的な方法について考察する。

2 研究目的

学校として、学級担任としてどのように中学生期の子どもをもつ家庭を支援できるか、また子どもの様子や日々の小さな気付きを、情報として学校と家庭においてどのように効果的に交流させ、それぞれの子どもの豊かな人間性の成長につなげるかを考察する。

3 研究方法

- (1) 学校としての家庭教育支援
- (2) 学級担任としての家庭教育支援
- (3) これまでの取組の成果と課題
- (4) 親から子へのラブレタープロジェクトの実践による家庭教育支援

4 研究内容

- (1) 学校としての家庭教育支援

ア 学校の現状を伝え、保護者の願いや意見を知る活動（自由参観）

自分の子どもだけでなく学校全体の子どもの姿をありのままに参観し、保護者の立場から率直な感想や意見を出してもらうために行っている。午前中1～4限の間に、どのクラスでも自由に参観して感想や意見を書いてもらっている。年に5～6回設定し毎回40～50名の参加がある。アンケートの内容は全教職員、PTA役員に公開し、教育活動の改善に役立てている。

イ 子どもや教育について教職員と保護者が膝を交えて語り合う活動（地区別懇談会）

学校が生徒指導上多くの課題を抱えているときは「先生がきちんと指導してくれない」「家庭できちんと教育してくれない」と相互批判、相互不信に陥る可能性がある。学校と家庭が信頼し合い、役割分担をしながら連携してこそ成果が表れる。そのため、本校では、校区を8地区に分け、年間8回、19：00～21：30の時間で地区別懇談会を開催している。学年単位の小グループでの話し合いで、具体的な問題について意見を出し合い、共通理解を深めている。

ウ 活気ある美しい学校、地域をつくる活動（オアシス運動・環境美化ボランティア活動）

子ども、保護者、教職員が一体となって取り組むことによって相互の関係が深まり、子どもを変えていく契機になるのではないかと考え、毎月1日と15日の2回、学校周辺の5か所にPTA約50人が立ち、声かけや登校の指導をする「オアシス運動」や、生徒会の呼びかけで子ども、保護者、教職員が参加し、トイレ掃除や除草作業、壁の汚れ落としなどを年3回行う「環境美化ボランティア活動」を実施している。

- (2) 学級担任としての家庭教育支援

ア 学級通信

保護者にとっては、学校の様子をあまり話さなくなった子どもがどのような学校生活をしているのかを知り、会話のきっかけにしたり、家とは違う子どもの姿を認識したり、反抗期で家庭では日ごろあまりほめる機会がない子どもをほめる材料として見てもらっている。子どもにとっては、自分たちの生活を振り返ったり、自分以外の様々な考えを知ったりすることにも役立っている。また、学級通信を家族が読むことで、家族との会話のきっかけになるという意見もある。

イ 日記

毎日終礼時に日記を提出させている。担任が自分の学級の子どもに会うのが朝礼と、昼食と、終礼だけという日もある。そのような中で学級の子どもの様子を十分に把握し、子どもの変化を見逃さないというのは難しい。思春期のこの時期、自分の傷ついた心を素直に口に出せないまま下校したり、伝えたい思いを誰にも言えないで一日を終えたりする場合も多いと考え、直接言えなくても、日記に書くよう呼びかけている。

ウ 家庭訪問

日々の生活の中で、保護者と話をしたいことが出てきたとき、良いこと悪いことに関係なく、

できるだけ家庭に伺い、直接話をするにしている。

(3) これまでの取組の成果と課題

学校として行っている、保護者と学校がつながる活動、保護者と子どもと教職員が一体となって取り組める活動、また地域と子どもがつながる活動に対しては、当初は保護者から厳しい意見や不信感、批判も多かったが、自由参観や懇談会などの回を重ねるごとにどのようにすればよいかを共に悩み考える姿勢や、それぞれの家庭教育の有りようを振り返る意見なども多くなってきている。また、ボランティア活動に協力してくださる保護者の数も増え、子どもの活動を実際に見、協力しようとする姿勢も感じられるようになってきた。オアシス運動には生徒会を中心に子どもの参加も増え、より活気が出てきている。又、懇談会などで保護者から出た「授業時間の確保」、「体操服の改善」などの願いを受けての改善がなされ、学校の「学校に携帯電話を持たせない運動」についても保護者に浸透しつつある。

学級通信については、学級担任から子どもと保護者へという一方向で進んできたが、本当に保護者や子どものニーズに合っているのか、また、毎週子どもを通じて、保護者の元までスムーズに届いているのかを確認したいという思いがあった。そのために、一度学級通信にアンケートコーナーをつくり、通信やその他の事柄についての保護者の意見を聞く機会をつくってみた。ほとんどの保護者からアンケートの回答があったが、今後の課題は、回答を書いてもらえない家庭とスムーズに情報を交流するための工夫である。

日記については、一言のつぶやきや文の調子、字の様子がきっかけで問題や変化に気付くこともあった。自分の気持ちや出来事について、言葉で伝える力の乏しさが日記にも反映している子どもが何人かいる。うまく言えないからキレたり、思っていることをいつも溜め込んでしまうというような傾向が考えられるので、200字日記を始めることにした。200字にできない場合でも100字は書こうということで、内容を、読む人を意識して、自分の思いを伝えるものにしようと提案した。日ごろの学級の様子や面白そうな話題を選んで、子どもに前もってサンプルを示し、興味をもって取り組めるようにすると、日記には大きな変化がみられ、以前よりもずいぶん分かりやすい文章で伝えられるようになってきた。これを、家庭で口数が少なくなった子どもの声の代わりにしたり、気付いたことがらを家庭に伝えたりするために、学級通信でいくつか紹介している。

家庭訪問では、玄関先での立ち話ですますようにしているが、保護者の思いや願い等をタイムリーに知ることができ、短い時間でも、直接会って話をすることのメリットは大きい。当初は家庭訪問に対して、何か悪いことをしたのかと心配する保護者もいたが、担任の考えが浸透するにつれて、家庭の理解の幅が広がった。課題としては、連絡がとりにくかったり、保護者の都合により家庭訪問もできず、なかなか話が伝わらなかつたりする家庭とどのようにして連携をとっていかかということである。

これまで学校として、学級担任としての取組を振り返って思うことは、この時期の子どもが安定した表情で生活し、様々なことに挑戦し、安定した人間関係を築いていくためには、家庭と学校が協力し、互いに子どもを見守っていかうとする姿勢が必要だということである。大人への道を歩んでいる子どもにとっては、この時期に、改めて自分らしさを認められ、自分の成長を確認し、自分の存在意義を実感できる機会が必要である。子どもの現状を見ると、自分の価値を見いだすために、比較をすることで強弱の力関係をつくり出したり、他人を傷つけることで自分が優位に立ったりといった悲しい人間関係もある。また、不安感を消すために問題行動に出る子どもも少なくない。自分が、かけがえのない存在として愛されていることが実感できれば、自分と同様に

まわりの人にも家族があり、たくさんの人に愛されている大切な存在であることも感じる事ができると思う。そこから、互いを尊重できるような人間関係を形成し、自信をもって進路を切り開いていく力が湧いてくると考え、次のようなプロジェクトを企画した。

(4) 親から子へのラブレタープロジェクトの実践による家庭教育支援

ア プロジェクトのねらい

これまでの取組を通して、いくつかの家庭に共通して、親子の間にギクシャクとした感じがあることに気付いた。互いに愛情があるのに、それが伝わりにくくなっていることは、思春期の子どもをもつ家庭に特有な状況ではないかと感じた。ふだん口数が少なく、反抗的に対応してしまい、素直に家族とゆっくり話す機会も、ほめられることも少なくなる傾向にある子どももいる。進路選択や職業体験を控えて、親子間で互いの愛情の確認をする絶好の時期だと考え、このプロジェクトを行った。

イ 概要

ラブレタープロジェクトとは、まず親から子どもにラブレターを書いてもらい学級担任との二者懇談で子どもがそれを読んで返事を書き、担任からの手紙を添えて、保護者に届けるというものである。学級担任は親と子の間に立ち、互いの愛情を確認するための仲介役のような役割を果たすことになる。1学期の三者懇談時、子どもには一切内容を知らせずに、保護者に夏休みの宿題という形でラブレターをお願いし、2学期の始業式に、子どもを通じて封筒入りの手紙を担任に提出してもらうことにした。10月から子どもとの面談を通して親からのラブレターを渡し始め、返事を書き終えたところから、家庭訪問をして届けた。

ウ 反応

ラブレターは、ほとんどが母親からであった。予備も含めて2枚ずつ便箋を入れておいたので、中には2枚にわたる長いものや、父親と母親が1枚ずつ分けて書いたものなどもあった。内容も丁寧なもので、子どもが読んだときの感動も大きかったようだ。

子どもとの面談では、照れくさそうな表情をして読み始め、真剣に黙々と読み、そのあと、ホッとした表情になって、いつもより担任と話を量が増えた子どもが多かった。書いた返事については、子どもから親に届けることも考えたが、照れくさくて渡せない可能性があることと、実際に会ってこの企画についての感想や

図1 ラブレタープロジェクトの保護者への依頼文

2年1組の保護者のみなさまへの夏休みの宿題のお願い

三崎 佳余子

いつも学校教育にご理解ご協力をいただき、感謝しております。

突然の家庭訪問や電話にも、こころよく対応していただき、いろいろとお話を聞かせていただけること、気になることは担任までお知らせいただけることも、大変嬉しく思っております。ありがとうございます。

さて、先日の授業参観の後の学級懇談会に参加いただいた保護者のみなさんには説明をして、ご了承いただいたのですが、夏休みを利用して、ひとつ子どもたちのためにご協力をお願いをしたいことがあります。

「わが子へのラブレタープロジェクト」と名づけてみました。要は、お子様への愛情や願いを手紙にさせていただきたいと思えます。日ごろ忙しい生活の中で、ゆっくり話し合ったり、思い切り褒めたり、愛していることを伝えたり……というのはなかなかできないものですね。おまけに注意をしないといけなくも時期です。でも、思春期の今、もう一度家族の愛情や思いをストレートに受け取ることで、ぐんと大きく成長できるような気がするのです。

現代の生活で、子どもたちが心を痛める問題がたくさんあります。いじめ、荒れ、人間関係がうまくいかないしんどさ、将来への不安、成績などに対するプレッシャー、本当の意味でホッとする時間の余裕のなさ、などなど……。いつの時代もそのような悩みはつきもので、私たち大人もみんな、そういうものを乗り越えてきたわけですが、できることなら、今の時期にもう一度自分の存在価値を実感し、自信を持って今後の将来や進路決定に向かって行って欲しいと思えます。

日々、私も学校では、注意をしなければいけないことも多いですが、クラスでできるだけみんなに対して「大好きよ〜」とか「そういうところ素敵だね」「すごいね。」など、大げさに、またストレートにオープンに愛情を伝えるようにしています。みんな「うえ〜」とか「恥ずかしい〜」とかいって、まんざら嫌な顔をしません。反対にニコニコして聞いています。また、こうなって欲しい、こうあってほしいという願いも、伝えるようにしています。やはり大人でも子どもでも、褒められたり認められるのは大好きです。大事にされているという実感も欲しいものです。次に何かをするエネルギーというのは、そういうところから湧き出てくるような気がします。その第一弾として、和氣にそれぞれのことを紹介させていただきました。あれだけでも子どもたちはそれぞれのところを一生懸命読み、ああでもこうでもない話しながら、次はいつだ、誰のことだと催促していたものです。おかげでクラスの中で、それぞれの良いところを探すのも上手になり、傷つけあうような、ぎすぎすした友達関係ありません。またそれぞれ本当にのびのびとよくがんばっています。嬉しいことです。

そういうわけで、今回は子どもたちには内緒のご褒美プロジェクトです。2学期、それを使って人権について、人としてどう生きるか、どれだけみんなが大切な存在かを学習したいと思います。ありきたりの教材ではなく、新鮮なおどろきと、自分に直接つながっているものから始めたいのです。勉強した後、最後にそとそれぞれのお子さんに手渡して少しずつ話をする機会を持ちたいと思えますので、できるだけ全員分いただきたいのです。お忙しい中、無理をお願いしていることは重々承知での提案です。どうぞお願いいたします。

<方法>

※ 別紙にお子様のお手紙を書いてください。生まれるときのこと、今まで育ててきた中でのごきごきや思い出、愛情、思い、願い、将来にむけてなどの内容で自由にお書きください。イメージは、ラブレターのよう感じます。失敗したときように2枚便箋をいれますが無理の無い量でけっこうですので、よろしくお願します。子どもたちが夏休みの宿題をしている様で、お手紙をお書きいただければ幸いです。

※ **この封筒に、必ずのりで封をして、9月1日までに、印を押し通知表と一緒にお子様に持たせてください。できるだけこの内容は子どもたちには秘密でお願いします。照れくさくても、少々大げさなくらいの程がストレートに伝わります。**

また、このプロジェクトについてのご不明な点やご意見、夏休み中お子さまの様子等で気になることなどがありましたら、ご連絡なくお知らせください。

反応を聞きたいという理由から、家庭訪問をして届けた。家庭訪問では保護者から次のような反応があった。

- ・最近、親や家族に対する言葉が優しくなった。
- ・学級通信などを、素直に自分から出して見せてくれるようになった。
- ・手伝いなど、素直に自分から仕事を申し出てくれることが増えた。
- ・手紙を読んだ日、妙にいつもより可愛らしくて素直だった。
- ・中学生になってからいつも友達優先だったが、最近休日の買い物などに一緒に出かけてくれる。
- ・「もう私も中2だし、これからは私がお母さんの相談にのるから。」と手紙に書いてくれた。
- ・返事を読んで、普段あまり話さない子どもの思いにふれ、嬉しくて涙が出た。
- ・何でも親に話してくれていた小さい頃は、思いを言葉や文字で伝える機会もあったが、年齢とともに、話さねあまりしなくなった。手紙としてもらえる形に残って、何度も読み直すことができるので、嬉しく思う。
- ・手紙で、疲れが飛んでいった。宝物にして、子どもが大きくなったとき見せてあげようと思う。
- ・子どもに返事のお礼をいうのをきっかけに、久しぶりにあたたかい会話ができた。
- ・手紙について話をしても、恥ずかしがって何も話してくれない。
- ・先生が自分からの手紙を渡しに来ると知って、学校から帰ってきて、自分が書いた手紙の内容について、「いろいろ書いたけど、あれは形式的なものだから。心にもないことを書いてしまった。」など、顔を赤くして言い訳ををさかんにしていた。あんなに照れている姿を久しぶりに見た。

エ 気になる子どもと保護者について

いつまでもラブレターを書いてもらえない家庭が1軒だけあった。家庭訪問も拒みがちでふだんから連絡がつきにくい家庭である。何度もお願いの電話をしたが、一向に進まず、子どもとの面談の日が近づいてきた。

面談の2日前、電話をしたときに父親が、「実は何から書けばよいかわからないまま、そちらに気持ちが向かずにはいた、手紙にするのは難しい。」という話をしてくれたので、用意していた質問をいくつかして、その答えを担当が代筆する形でラブレターとすることにした。電話では、思ってもいなかったほどの感情を込めて、父親が子どもに対しての思いや思い出を語ってくれたことに驚いた。おかげで、ほかの子どもとは形は違うが、心のこもった手紙が出来上がった。

面談の日、その生徒は、自分の分はないので、担任との二者懇談だけをするのだと思って教室に入ってきた。封筒の中には、事情を説明したメモと、父親から聞き取った手紙を入れておいた。封筒を見て非常に驚いていたが、そこには確実に喜びが感じ取れた。手紙の中に、この生徒と家族しか知らない事柄がいくつもあったので、本当に父親が言ったことだという確信ももって、ほかの子どもと同様の反応が得られた。

このプロジェクトによって、今まで知りえなかった父親の気持ちを聞くことができたことや、育ってきた様子を知ることができたことがよかった。しかし、できればほかの生徒と同じように、短い文でもよいから実際に親の手で手紙を書いてあげて欲しかったと思う。家庭の状況も、まだ把握しきれていない部分があるが、この後、電話連絡したときの父親の声が明るくなり、話がスムーズに運ぶことが多くなってきた。子どものほうも、生活の不規則さが以前より改善され、遅刻もせず毎日元気に登校している。今後も家庭状況や保護者の考えをより深く理解し、ともに

見守っていくために、連絡を密にしていきたい。

オ まとめ

この取組についてのまとめを学級活動の中で行った。それまで子どもに伝えていなかったプロジェクトの流れを説明し、この取組での自分の気持ちの動きや家の中での変化などについて意見を出し合った。思春期という時期の特徴についても話をし、今の時期は自分らしい生き方を確立するための土台づくりをしていること、日々の学校生活、家庭生活の中で、友人、教職員、家族とかかわりながら、豊かに成長していることなどを話した。自分たちの思いを出し合うことで、共感し合えるものが多くあったように思う。又、ラブレターやその後の家庭訪問の中での話から、親の思いもいくつか紹介し、学級担任としてこの企画をした理由と思いを伝え、まとめとした。自分がかげがえのない存在として大切なのだという自信をもって、今後更にその人間性を豊かに成長させてほしいと願っている。同時に、周りにいる人々も自分と同様に尊い存在だということを感じてかかわってほしい。この学級活動は、一度立ち止まって、自分の変化や気持ち、生き方などを考える時間として有意義であったと思う。

5 研究結果と考察

学校として、学級担任として子どもとかかわり、取組をしていく中で思うのは、思春期という枠でくられる子どもにも、いろいろな面があり、様々な背景を背負って生活しているということである。家庭に悩みを抱えている子、学校生活の中で悩みを抱えている子、自分をうまく表現できず人間関係に悩む子などに対して、一つのマニュアルでは対応できない。

子どもの変化、家庭の状況や願いを的確にとらえ、それらの様々な状況に対応しながら、子どもが日々の生活経験の中で、自己を確立し自分らしく生きていくための土台作りをするのを支援していきたい。そのために、家庭と学校とがつながることで思春期特有の家庭内のギクシャクとした関係を改善したり、子どもの人間性の豊かな成長のためにはこの時期がとても意味深く大切であること を親子ともに実感したりできるような取組を続けていきたい。

6 おわりに

今回、子どもはラブレタープロジェクトを通して、親から自分への愛情、自分の中にある親への愛情、そして自分から自分への愛情を確認する機会をもつことができたと思う。親は、日頃言葉数の少なくなった子どもに対して、自分から愛情をストレートに発信したことや、子どもからの返事によって子どもの中に存在する自分への愛情を感じたことで、それぞれの思春期の子どもへの親のかかわり方について振り返っていただくことができたと思う。子どもや保護者とも随分深く話ができるようになってきた今、学校と家庭とが子どもに関する情報を交流し、更にそれを互いがうまく循環させることの必要性を実感している。子どもと家庭の思いや願いを受け止めながら、情報の交流にとどまらず、生徒の豊かな人間性を培う家庭教育の支援のために、その効果的な循環を目指して次の実践につなげていきたい。

参考文献

- | | | | |
|--------------|------|----------|------|
| (1) 思春期を生きる力 | 石田一宏 | 大月書店 | 1999 |
| (2) 思春期のこころ | 清水将之 | 日本放送出版協会 | 1996 |
| (3) 思春期とは | 江幡玲子 | 小学館 | 1986 |